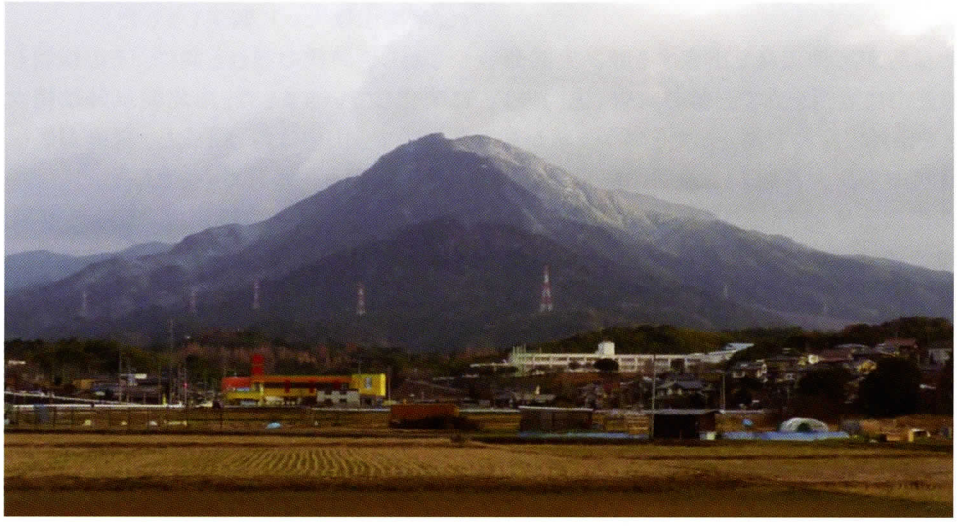
国指定史跡 宝満山



宝満山の遠景。手前は愛嶽山（筑紫野市側から）

筑紫野市北東に位置し、筑紫野市と太宰府市にまたがる標高829.6mの山で、山頂に竈門神社上宮、山麓に下宮があります。頂上からの展望は素晴らしく、博多湾や玄界灘、背振山・英彦山などの峰々、天気の良い日には雲仙岳も遠望できます。四季を通じて登山者が多く、福岡県下で最も人気のある山と言われています。

宝満山は古代から霊山として人々の信仰をあつめてきました。江戸時代の儒学者、貝原益軒の『筑前国続風土記』には、国の繁栄招福除災、干ばつ・水害などの祈願において必ず霊験があるとされています。かつては遣唐使の航海安全祈願や国家鎮護などの祭祀も行われ、のちには英彦山と並ぶ九州山岳修験のメッカとして繁栄しました。

山中は巨岩が多く、江戸時代、博多聖福寺の仙厓和尚の揮毫による「仙竈」の文字が刻まれた大岩（竈門岩）や、「五井七窟」と呼ばれる山岳修験遺跡などが残されています。

古代から近世にかけての多くの遺跡と、その保存状態が良好であるとして、平成25年(2013)10月17日、霊山としては、鳥海山、富士山に続く3例目となる国の史跡に指定されました。

■三つの山名

宝満山はまた、別名「御笠山」、「竈門山」ともよばれています。

「御笠山」というのは、筑紫野市側（南側）から山を望むと、「笠」の形に見えるところからきたものです。「笠」は古来「神の依りまし」とされていました。また、御笠山を源として流れる宝満川は、かつて「蘆城川」といわれ、一帯の景観を愛でた万葉歌人の詠んだ歌が残されています。

『竈門山宝満宮伝記』には、「御笠山には大田明神と小田明神という地主神が住んでいたが、大田明神は御笠山を竈門大神に奉って一ノ鳥居の側の濡衣宮に遷った」とあります。これら大・小の「田」という神名からも、御笠山はもと

竈門（かまど）岩　九州国立博物館提供

もと「水分の神」の坐す山であり、農耕に根付いた、人々の篤い信仰の対象の山であったことが覗えます。

「竈門山」は最も永く使用されている山名で、その起源については

1. 神功皇后が応神天皇を出産する際、宝満命が御笠山に竈門を立て三躰の大岩（竈門岩）に竈をかけて産湯を沸かしたという伝承から（『竈門山宝満大菩記』・『竈門山由来』）。
2. 山の形が太宰府市側から見ると竈の形に見え、また常に深い雲霧に覆われ、ちょうど竈で煮炊きをしているように見えるところから（『筑前国続風土記』）。
3. 663年の白村江の敗戦後、唐・新羅に対する国防拠点として大宰府が設置されたが、その鬼門（東北）に位置するところから、鬼門除けと大宰府鎮護のため、道教で一家の守護神とされる「竈神」を祀ったので「竈門山」というようになった

などの説があります。

竈門神社社伝では、天智天皇の時代に大宰府鎮護と国家繁栄のため、鬼門にあたる御笠山に八百万の神々を祀ったのが祭祀の始まりで、次いで天武天皇2年（673）、心蓮上人が山中で修行していると、玉依姫が現れたため、山頂に上宮が建てられたとしています。『扶桑略記』（寛治8年（1094））には、延暦22年（803）、最澄が唐へ渡る際、航海の平安を「竈門山寺」で祈願し、4躯の薬師仏を彫ったと記されており、その当時、あるいはそれ以前から既に「竈門山」の山名は成立していたと考えられます。また、最澄の没後、その遺記に基づいて沙弥証覚が承平3年（933）に「六所宝塔」のうちの1つを竈門山中に建てた（『石清水文書』）と伝えられていましたが、昭和56年（1981）にその址と思われる遺構が発見され、平成21年（2009）、この推定址地に「安西筑前宝塔」が建立されました。

■宝満山

「宝満山」という山名は、八幡護国思想が高まりをみせた平安時代末期、竈門神社祭神の玉依姫が神仏習合的名称「宝満大菩薩」とされたことによります。同様に、神功皇后は「聖母大菩薩」、応神天皇は「八幡大菩薩」となり、竈門山は「宝満山」とよばれるようになったのです。嘉承元年（1106）には正一位の神階が与えられ、宝満山は大いに繁栄しました。

しかし、時代の流れと共に、その様相も次第に変化していきました。南北朝以降は相次ぐ戦乱の中で、山中は城塞と化し、荒廃が進む中で祭事や伝承も失われていきました。

江戸時代になって福岡藩によって復興が行われ、宝満山は秘儀を旨とする修験の山として、新たなる「霊山」としての道を歩んで行くことになるのです。

ところが、明治元年（1868）神仏分離令が発布され、宝満山にも廃仏毀釈の嵐が吹き荒れました。多くの建物や仏像・仏具などが破壊され、焼き捨てられてしまったのです。山の8合目にあった竈門神社中宮もこの時破壊されました。さらに、明治5年（1872）には修験道が廃止され、山伏も山を下りることを余儀なくされました。その後、明治22年（1889）、里に下りた山伏たちによって宝満山峰入りが復興されました。その後も峰入りは度々行われていましたが、昭和57年（1982）には心蓮上人1300年遠忌を記念して、「宝満山修験会」が結成され、本格的な復興が遂げられました。現在、毎年5月の第2日曜日に宝満山峰入り、同最終日曜日に採燈護摩供が行われています。竈門神社は縁結びの神としても人気をあつめ、多くの若い女性たちが参拝に訪れています。（清原倫子）

〈参考文献〉
森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』 大宰府顕彰会 2008
中野幡能 『筑前国宝満山信仰史の研究』太宰府天満宮文化研究所 1980 ほか

竈門神社上宮 九州国立博物館提供

2014. 3.31. 発行